

安村英敏さんのLife History

14L038 田中 里佳

【はじめに】

今学期最初の文化人類学の授業で神田先生より「祖母または祖父または戦前生まれの人のLife History（生活史）」という課題を与えられた。身近にそのような人がいなかったの、ボランティアセンターの池田先生から社会福祉協議会を通じて、安村英敏さん（85歳）を紹介していただいた。安村さんは元気な方で、声も大きく、技術職の方であったためパソコンも使いこなし、インタビューに際しては、高齢の方とお話をしているのだという印象はあまり受けなかった。また、新発田市内在住で大きな御自宅に一人暮らしをされていて、ご家族のご予定を考慮することはなかったが、他人が何度も訪問するという煩わしい依頼にもかかわらず、快く数回に渡る取材にご協力いただいた。

生活史というからは、初めは伝記のようなイメージで取材を始めたのであるが、ある日の文化人類学の授業で「世界観」という言葉に出会い、人生の様々な事柄に対しての時間的な長さや内容の濃淡に関しては、客観的な事実とは別に、体験した人の主観で見た事実があるのだということに気付いた。そこで、このレポートは、安村さんが自発的にお話になった事柄を最も大切にまとめることとする。なお、文中の敬称は略した。

氏名	安村英敏（やすむら ひでとし）
出生地	富山県富山市
兄弟	四女六男10人兄弟の9番目（五男）
年齢	85歳（2014年11月現在）
生年月日	1929年（昭和4年12月14日）
現住所	新発田市内
家族	一人暮らし（奥様は8年前に病死、一人息子は教員で勤務地住まい）
暮らし	家事全般をこなし、車の運転もする
趣味等	歌を歌うこと（サークルに参加）、海外旅行、パソコン、ハーモニカ演奏で施設を慰問すること

【略歴】

1929（昭和4年）0歳 富山県富山市小泉町559番地に生まれる
12月14日

1945（昭和20年）15歳 4月	志願し滋賀海軍航空隊に入隊
1945（昭和20年） 9月2日	終戦後富山市に戻り学校に復学
1950（昭和25年）20歳	倉敷レーヨン株式会社に就職
1960（昭和35年）30歳	長男誕生
1963（昭和38年）33歳 1月	単身で大阪に転勤 兵庫県西宮の社員寮に住む
1963（昭和38年） 7月	妻と息子を迎え、大阪府豊中市の社宅に引っ越し
1966（昭和41年）36歳	新潟県胎内市（旧中条町）に転勤（工場）。胎内市内の社宅暮らし
1974（昭和49年）45歳	アフリカのアルジェリアに転勤
1976（昭和51年）47歳	新潟工場に戻る
1981（昭和56年）51歳	現在の家を建てて移る
1984（昭和59年）54歳	新潟東港の火力発電所工場の建設に携わる
1989（平成元年）60歳	定年
1990（平成2年）60歳	初孫生まれる
1996（平成8年）66歳以降	妻の看病生活（慢性関節リュウマチ）
2006（平成18年）76歳	妻が亡くなる
2014（平成26年）85歳現在	世界旅行等たくさんの趣味を日々楽しむ

[1 幼い頃から小学生時代のことと家庭環境]

当時、富山市内は中央を市内電車が走り、その両側に商店が立ち並び、その後ろには田畑が広がっていた。

生家は富山市内でメリヤス屋（衣料店）を営んでいた。店の前には電車の「小泉町停留所」があり、乗客が乗り降りしたり、電車を待ったりしていた。運転手が紐を引っ張ってチンチンとベルを鳴らして走ることからチンチン電車とも呼ばれていた。店の正面頭上には大きな看板があり、「安村商店」そして莫大小（メリヤスと読む）、足袋、作業服などの取り扱い商品が書かれ、福助の絵も描かれていた。

店の中には繊維商品が並べられ、ミシンや足袋を作るための木製のテーブルと木型があった。家の裏には80坪くらいの庭があり、柿、栗、イチジク、ぶどう、棗、びわ等の果樹があった。その奥には100坪ほどの畑があり父が商売の合間にいろいろな野菜を栽培していた。

父の清太郎は無口で背が母よりも低く、男性としては見栄えが悪かった。しかし、体が頑丈で真面目。一度も病気になることなく、こまねずみのようによく働いた。店では卸問屋から仕入れた肌着、靴下、作業着等を販売していたが、父は足袋職人としてはかなりの腕前であり、遠方からの注文があったり、ズボンやワイシャツ等も仕立てていた。日中戦争から続く戦時下には朝鮮半島から連れてこられ土木建設に従事していた男達の飯場をまわり、上の布部分が破れた地下足袋を貰ってきて、まだ使えるゴム底部分を使って「再生地下足袋」を作り売り出した。新品が買えない時代だったので大人気になった。また、万事に器用な人で、自分一人で畑仕事や家の増築をした。

母のフジは勝ち気であったが、やや膨よかで美しく社交的なため店の客に人気があった。客に「べっぴん」などと言われ、父に焼きもちを焼かせることもあった。気難しいところのある父によく尽くし、商売の手助けをしながら子供達を育てた。

両親ともに農家の出で、隣村同士のお見合い結婚であったが、夫婦仲が良く、子供達は喧嘩を見たことがなかった。

英敏は六男四女の9人目に五男として生まれたが、四男は生後半年で病死し、兄弟姉妹の間の年齢差が大きかったことから物心つく頃同居していたのは、父母の他に三女のあや子と四女のノブ子、そして六男の正治だけだ。戦前は尋常小学校6年間の義務教育かその上の高等科2年間を終えると働きに出るのが普通だったので、兄弟達もそのようにして学校を終えるとそれぞれ奉公に出たり、会社に就職したりした。兄弟姉妹の関係と生まれた年、就いた仕事は以下の通り。

長女 みよ （明治44年） 助産師の資格を取得し、後に開業

長男 清正 （大正 3年） 機関車の設計技師

次男 清孝 （大正 5年） 紳士服仕立て店に弟子入りし、後に開業

三男 健造 （大正 7年） 時計店に弟子入りし、後に開業

- 次女 花子 (大正10年) 着物の仕立て屋で修行し、結婚後は温泉宿の土産物店を営みながら着物の仕立ても引き受ける
- 三女 あや子 (大正12年) 電話の交換手、結婚後退職 (今でも富山県で健在 葬式などで会う)
- 四男 秀信 (大正14年) 大正15年5月7日に死亡
- 四女 ノブ子 (昭和 2年) 電話の交換手、後に交換手養成の先生
- 五男 英敏 (昭和 4年) 工場の設計技師
- 六男 正治 (昭和 8年) 炭酸飲料の会社勤め

英敏は6歳で富山市星井町小学校に入学。男子級(男子のみのクラス)、男女級、女子級の3クラスのうち男子級に入る。各級の生徒数は42名。4年生からは一生懸命勉強するようになり、5、6年生では級長に選出された。

学校から帰ると庭のイチジクや柿の木に登り、股がって果実を食べるのが楽しみだった。母と一緒に山に栗拾いに行ったこと、父とは畑の肥料(人糞)やりや収穫を手伝ったことを覚えている。また、当時は富山市内で大火がよくあったが、遠くまで見に行き夕食の時間に間に合わずに母に怒られた。友達と近所の農家の稲藁をいたずらで崩して怒られたこともある。

兄弟とは仲良くしていた。4歳年下の弟は体が弱く学業も芳しくなかったので、労って勉強をみてやった。家の近くの路上で足を蹴られているのを目撃した時は、相手を取っ捕まえて殴り、それからいじめはなくなった。当時は子ども同士で戦うこともあり、他校の生徒にいじめられるのに備えて通りのあちらこちらのゴミ箱(各家庭が軒下にゴミ箱を置きゴミが収集されるシステムだった)の下に釘を打ち付けた角材を隠していた友達もいた。

家業の衣料品店は365日休みがなかったので、家族で遊びに出かけたことはほとんどないが、家の近くの大きな神社に何回かサーカスが来て母と見に行った。そこでは空中ブランコや象、ライオン、猿の芸を見た。その頃世間では人さらいを職業にしている者がいて、さらわれた子どもはサーカスに売られて芸を仕込まれるという噂があった。

昭和11年に日中戦争が始まった頃は、子どもでも日本が戦争をしていることは知っていたが、自分の周りのはのんびりしていて、物も十分にあった。ただ、国からは食料の自給自足が推奨され、市からは市民に畑を作るように土地の貸し出しがあった。安村家でも100坪の土地を借りてジャガイモ、キャベツ、なす等を作っていた。英敏も人糞を荷車に乗せて父と一緒に畑までの3kmの道のりを運んだりした。徴兵される人は少なかったが、安村家からは長男が2回、三男が1回満州に出兵した。ただ、二人とも技師、職人であったため優遇された。特に三男の健造は技術が上官に重宝され、他の人が零下36度の屋外で訓練する中でも連隊の暖炉のある部屋で時計の分解修理をしていたという。

昭和16年12月8日に太平洋戦争が始まると、次第に軍国主義が高まり登下校の途中では神社に最敬礼させられた。また、小学校の正門を入った所には奉安殿（ほうあんでん）があり、中に奉られた天皇、皇后の写真に登下校時に最敬礼させられた。

[2 旧制中学時代]

旧制中学に入ると機械体操部に入り県大会では3位に入賞した。

世間は軍国主義が一層濃くなり、授業では週一回軍事教練があった。専属の軍人（将校）がいて銃を担いでの軍隊的スパルタ訓練があり、生徒は次々に張り倒された。2年生の2学期からは英語の授業は敵性語ということで廃止になった。

戦争は勝ち戦から負け戦のムードに変わり、3年生の4月から3年生以上は軍需工場で兵器作りをした。女学校の女子学生もそうだった（当時は男女で別の学校）。一般社会人も商業、サービス業の男女は軍需工場へ招集され、男子は「白紙」、女子は女子挺身隊と呼ばれた。白紙（しらがみ）というのは徴兵される男子の元へ届くのが赤い紙「赤紙」だったことに対して、工場に招集される男子には白い紙「白紙」が届いたことからこう呼ばれた。人口14万人の富山市郊外に、従業員4万8千人の軍需工場があり広大な寄宿舍（1部屋に20名居住）が併設されていた。朝の通勤時間には、市内から4カ所の工場の門へ歩く工員の姿が途切れず続いた。工場では溶鉱炉の灼熱の中で過酷な重労働をし、休日は月に1日のみ。その頃には食料不足も深刻になり正に地獄の日々であった。

そうした中、同じ旧制中学からは上級生が次々と櫓を掛けて「行ってきます。」と出兵して行った。兵隊になることは強制ではなかったが、校長先生をはじめ先生方が「国のために志願しなさい。」としきりに働きかけてきた。新聞には「アメリカは日本人を抹殺すると言っている。」と書いてあり、学校や周りの大人たちは日本人はいずれ皆殺しになると言っている。英敏も「日本は滅ぶ、いずれ自分は死ぬ」と思っていた。どうせ死ぬなら家族が3ヶ月でも長らえるようにと飛行兵志願を決意した。家では既に兄二人が戦争に行っていたので「行くな」と止められたが、志願した後の身体検査等の試験では一発合格し、滋賀県の琵琶湖にあった海軍航空隊に入り予科練生になった。

[3 軍隊時代]

予科練の七つボタンの学生服は当時の男子の憧れであり、今でも学生服姿の写真を大事にしている。入隊した航空隊には全国から5,000人が集まっており、陸軍の飛行機とは違って空母艦から直接飛び立てる利点が非常に期待された隊だった。様々な人に出会ったが、その中には東大から学徒出陣できていて後に大臣になった現安倍首相の父もいた。

英敏たちは25人ずつ6班に分けられていたが、朝の起床から消灯まで班単位で、とにかく動作を速くすることが求められた。しかも、何か失敗することがあると責任は班全員でとらされ、「軍人精神注入棒」と書いてあるバットのような棒や、綱引きで使うような太いロープで毎日ぶん殴られた。殴られるのは必ず下半身だ。何故なら、頭を殴って耳が悪くなると飛行機乗りとして役に立たなくなるからだ。桶に水を入れて持たされることもあった。また、郷里に手紙を書く

際には封をしてはいけない決まりがあった。それを知らずに恋人に手紙を書いた者が、皆の前で班長に声を出して読まれるということもあった。

さらに、軍隊では学校以上に勉強をした。物理、エンジン、国語。それから学校では禁止されていた英語を敵の言葉を読むために必要ということで勉強した。その日に勉強したものは翌日に15分テストがあり、個人と班の成績が棒グラフで貼り出される。もし成績が悪いと班長が「今日は班の全員飯抜きだ。」と言って夕食は食べられない。本当は班長は別の部屋で夕食を食べていたのを皆知っていたのだが。とにかく皆必死に勉強して、夜の9時にラッパが鳴ると消灯になってしまうので、トイレで勉強を続けた。トイレだけは裸電球の常夜灯がついていたからだ。いつの間にか皆がトイレに集まって、よく徹夜で勉強していた。

あまりの厳しさに、同郷の富山県出身の先輩40人の内3人が逃げ帰った。もちろん帰りたくて帰れるわけではない。入隊した後に行われる二次試験で、聴力試験として背後の懐中時計の音を聞くテストがあったのだが、「造船所で働いていたので耳が悪いのです。(カンカンと金属を叩いて大きな音を出すので聴力が落ちる)」と言い訳して、聞こえないふりをしたのだ。英敏も帰ろうかと思ったが、出兵の際に家の近くの神社で皆がノボりを揚げて送ってくれたことを思い出すと、恥ずかしくて帰れなかった。それでも次々と後に続いて入隊してくる者がいるので、陰では節を付けて「♪～人の嫌がる軍隊に志願するバカもいる～」と歌われていた。

[4 終戦後]

富山駅に着いたら、市内は焼け野原になっていた。幸い家族は無事であったが、家は無くなり、トタンと木材を集めて建てた掘っ立て小屋に住んだ。戦時中父は稼いだお金で軍需工場の株を買い、倍々に増やしていたが、終戦と同時に価値を失ってしまった。また、戦後は激しいインフレがあり、父が持っていた民間企業の株も、一株がサラリーマンの月収くらいだったものが数ヶ月後にはタバコ一箱の価値になってしまった。父は相当がっかりしていた。

焼け残った軍需工場の寄宿舎を使って学校が再開された。英敏も4年生に復学し、電気も無い生活であっても軍隊の徹夜勉強に慣れていたことから、クラス1番の成績で卒業し、北陸電力社長賞を受賞した。

[5 会社員時代]

戦後の貧しい時代には大学は旧家のおぼっちゃま達が行くところで、旧制中学を卒業すると社会へ出るのが普通だった。北陸電力から就職の誘いがあったが、当時は水力発電が主であり、県内10カ所にあった発電所勤務が予想された。そうなると家を出ることになり、「单身生活にはお金がかかるので家に給料を入れることができない。」と母に反対されて断念した。仕方なく自宅から通える市内の幾つかの小企業に就職したが、勤めてはその会社が潰れる繰り返しで約4年間転々とした。

1950年富山市に倉敷レーヨン（現クラレ）の新工場が出来、就職。その後、大阪、新潟、アフリカのアルジェリア、そして新潟と1989年に定年を迎えるまで、会社の要請に応じて各地で

充実した会社員生活を送った。主に海外、国外においての新工場建設や新エネルギープラント建設に技術者として従事した。

特にアルジェリアではサハラ砂漠に三菱、日立、東芝などが協力して石油化学工場を作る大きなプロジェクトに派遣され、フランス語とアラブ語しか通じない環境に苦勞した。半年ぐらい経つとそれでも単語をつなげてコミュニケーションがとれるようになり、「何でも見てやろう」精神で、ポケットに小銭を入れてカスバ（暗黒街）に野菜を買いに行ったりした。それで漬け物を作って食べたりした。

1960年頃には工場に陸上部を作り、中距離走、後には競歩に転向し国体などで数多く入賞した。全日本陸上選手権50km競歩で入賞してローマ五輪候補になったが、出場は逃した。

従業員のレベルアップのために国家資格取得を奨励された時には、会社が講習や受験費用を支援してくれたので、多くの資格があればもし失業しても再就職に有利と思いきり果敢に挑戦し、衛生管理者や電気主任技術者など20以上の資格を取得した。

戦後すぐから写真や8ミリ映画制作の趣味を持っていたが、ラジオなどの電気製品を自作することも得意だった。白黒テレビの時代には組み立てキットが売り出されていたので、組み立てて市販完成テレビの4分の1の価格で販売してとても儲かった。

[6 定年後から現在まで]

定年直後に初孫が生まれ、教員の仕事が忙しい息子夫婦のために子育てを助けた。

孫二人の手が離れた頃、妻が慢性関節リュウマチを発症した。体のあちこちの骨が溶ける症状で何回も大きな手術をくり返し、亡くなるまで10年以上介護を続けた。

以後、現在まで一人暮らしだが、体が丈夫で家事や車の運転もでき、たくさんやりがいのある趣味もありいきいきした日々だ。

[おわりに]

安村さんには、4回に分けて合計7時間以上お話していただいた。私にとっては、聞き手になって一人の方からこれだけじっくり話を聞くのは今まで全くないことだった。また、お話しさせていただくまでは、戦前の家族の様子などはテレビなどで見て知った気になっていた。しかし、実際のお話を聞いてみると、まるで外国の話の聞いているように思えてきて不思議だった。それだけ安村さんが生きてきた日本と私が知っている日本が異なっているのだろう。私は今44歳で安村さんは85歳。数字ではたった41の違いなのだけれど。取材の間に最もよく考えたのは、もし私が安村さんと同じ年だったら、どういう人生を生きただろうかということ。そう考えると、次にまた機会があれば是非、その時代を生きだした女性の話も聞いてみたいとも思った。

最後に、インタビューなどしたことがないため、要領が悪く、自分勝手な私に辛抱強く付き合ってくれた安村さんに本当に感謝します。ありがとうございました。

(レポート指導教員 神田より子)